

令和 6 年 6 月 1 日現在

機関番号：37104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00811

研究課題名(和文)協同学習のための教育ファシリテーター養成プログラムの構築

研究課題名(英文)Developing Facilitators for Cooperative Education: A Training Program

研究代表者

岩田 好司(IWATA, Yoshinori)

久留米大学・大学共同利用機関等の部局等・特任教授

研究者番号：50309746

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文):本研究の主たる目的は、プロセスワーク(プロセス指向心理学)を応用することによって、現行の協同学習ワークショップを改善し、受講者たる教職員が教育ファシリテーターとして成長できる研修プログラムを構築することであった。

まず、プロセスワークのキーコンセプトを実際に教育ファシリテーションに応用したワークショップを構築した。次にこれを改善し、動画化した。そしてその動画を中心に理論的解説や、論文、カリキュラム案を作成し、ウェブサイトとして公開した。これによって「協同学習のためのファシリテーター養成プログラム」が広く利用可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、深層心理学に端を発するプロセスワークと教育心理学領域に属する協同学習の理論的統合を行い、その学際的な有用性、可能性を考察し、教育ファシリテーションへの具体的な導入方法を明らかにした点が挙げられる。

社会的意義としては、上の考察を踏まえてプロセスワークを応用したワークショップを構築、改善し動画化した点、そしてその動画を中心に理論的解説や、論文、カリキュラム案を作成し、ウェブサイトとして公開した点が挙げられる。これによって「協同学習のためのファシリテーター養成プログラム」が広く利用可能となった。

研究成果の概要(英文):The main purpose of this research was to improve the current cooperative learning workshops by applying process work (process-oriented psychology) and to create a training program that would enable the faculty and staff participants to grow as educational facilitators. First, we constructed a workshop in which the key concepts of process work were applied to educational facilitation. Next, we improved this and made it into videos. To the videos, we added theoretical explanations, papers, and curriculum proposals, which were published on a website. This has made the “facilitator training programs for cooperative learning” widely available.

研究分野：外国語教育

キーワード：協同学習 教育ファシリテーション アクティブ・ラーニング プロセスワーク 外国語教育

1. 研究開始当初の背景

協同学習はアクティブラーニングの中心的な方法としてニーズが高まっており、外国語教育の分野においても近年、教員の研修を目的とした協同学習ワークショップ（体験型研修）が多数開催されている。しかし、その多くが学習技法の習得に重きをおいており、受講者である教師が、ワークショップで協同学習の考え方や技法を身につけても、教え込み型ティーチャーから、学び合いの促進者（ファシリテーター）へと脱皮することに困難を覚えてしまうという状況があった。

2. 研究の目的

そこで、「協同学習ワークショップにどのような改善を加えたら、受講者たる教員が学び合いのファシリテーターとして成長できるか。そのためにどのような研修プログラムを構築すればよいか」というリサーチクエスチョンを立て、「協同学習のためのファシリテーター養成プログラムの構築」を研究の目的とした。

3. 研究の方法：プロセスワークの応用研究

どのようにしたら、ワークショップの受講者たる教職員が教育ファシリテーターとして成長できるか。そのための方策の要としてプロセスワーク（プロセス指向心理学）を応用することにした。プロセスワークはユング派深層心理学をグループワークに援用し、個人やグループの葛藤解決やコミュニティづくりのファシリテーション技法を発達させている（<http://www.processwork.org/>）。ファシリテーション技法は数多くあるが、プロセスワークの技法を教員研修に導入する最大の利点は、それが教師の自覚面での成長を促す点にあると思われる。プロセスワークは自覚（awareness）の実践であり、自覚によって自己の内部とグループで起きている変化（葛藤）を同時にファシリテートしていくことを大きな特色とする。たとえば、クラスが活性化しないとき、教師は学習者と同時に自己の内部にも目を向ける。すると学習者が自主的な活動を躊躇していることに気づくと同時に、教師である自分がそれを制御しようとして葛藤していることに気づくかもしれない（「自主的に活動しなさい。でも私の指示に従いなさい」）。教師の自覚の高まりとともに、もしクラスが能動的な学習を始めるならば、教師のファシリテーション技能は高まったといえることができるだろう。このように、プロセスワークを取り入れた研修を通じて教師は自覚を高め、教育ファシリテーターとして成長することができると期待された。

4. 研究成果

研究の主たる成果として、プロセスワーク応用研究によって現行の協同学習ワークショップを改善し、受講者たる教職員が教育ファシリテーターとして成長できる研修プログラムを構築できたことが挙げられる。以下に詳述する。

(1) 理論的可能性（学術的意義）

協同学習は教育心理学領域に属するが、本研究ではそこに深層心理学に端を発するプロセスワークの葛藤ファシリテーション理論をもちこむ。両者の理論的オリエンテーションは隔たっているので、両者の理論的統合を行い、その学際的な有用性、可能性を考察した。プロセスワークの葛藤ファシリテーション理論は、学習場面での協同にともなう葛藤をより精緻にファシリテートしていくアプローチとして有用であり、具体的な導入方法も明らかになった。

(2) プロセスワークの応用

上記の考察をふまえ、プロセスワークのキーコンセプトを実際に協同ファシリテーションに

応用したワークショップを構築した。キーコンセプトとは①シグナル（手がかり） ②エッジ（成長ポイント） ③ランク（力の上下関係） ④ロール（役割、観点）などであり、それらへの自覚を高めることによってファシリテーターとしての成長を促進できると考えた。

(3) 「気づきのファシリテーションワークショップ」の構築

ワークショップ改善のために参加者にインタビュー調査を行い、教師の変化成長のプロセスを促すうえでより効果的なワークショップを構築し、何度か実施した。「気づきのファシリテーションワークショップ」である。また、実施したワークショップをもとに、過去のワークショップも取り入れながら、「気づきのファシリテーションワークショップ」を疑似体験できるように、「ライブ版」を論文としてまとめた。ワークショップに実際に参加できる教員の数は限られているので、論文を読むことによって研修を体験することが誰にも可能になった。

(4) ウェブサイトの構築（社会的意義）

「気づきのファシリテーションワークショップ」を動画化し、その動画を中心に理論的解説や、論文、カリキュラム案を作成し、「協同学習のためのファシリテーター養成プログラム」と題するウェブサイトとして公開した（http://www.std.mii.kurume-u.ac.jp/~iwata/facilitator_program.html）。ウェブサイトは「気づきのファシリテーション」をメインモジュールとし、それを補足する形で必要に応じて「協同学習一般」モジュール、「外国語教育と協同学習」モジュール、「ファシリテーション一般」モジュールを学ぶことができる。ウェブサイトはグループでの受講に効果をより発揮できるように構築されており、受講者である教員（集団）のオンライン研修に、より役立つものと期待される。

(5) 今後の展望

本研究において通常の協同学習ワークショップに改善を加え、受講者たる教員が学びのファシリテーター（促進者）として成長できるプログラムを作成し、グループでの受講可能なウェブサイトを構築した。とはいえ、ウェブサイトを作りっぱなしにしておくわけにはいかない。プログラムの効果を継続的に測定しつつ改善していく研究が今後必要となろう。受講者は学びのファシリテーターとして成長できているのだろうか、プロセスワークの応用はうまく機能しているのだろうか、サイトの構成やプログラムの流れは適切だろうか、サイトは魅力的だろうかなどの点についてPDCAサイクルを回していく必要があると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岩田好司	4. 巻 56
2. 論文標題 日本語教育と協同学習	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 比較文化研究（久留米大学比較文化研究所+カイロ大学文学部日本語・文学科 国際共著）	6. 最初と最後の頁 116-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 岩田好司	4. 巻 27
2. 論文標題 気づきのファシリテーションワークショップ：協同ファシリテーターとしての成長をめざして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 久留米大学外国語教育研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩田好司	4. 巻 26
2. 論文標題 協同学習と葛藤ファシリテーション：プロセスワークの援用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 久留米大学外国語教育研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 岩田好司	
2. 発表標題 葛藤ファシリテーション入門：協同ファシリテーターとしての成長を目指して	
3. 学会等名 日本協同教育学会（オンライン）	
4. 発表年 2022年	

1．発表者名 岩田好司
2．発表標題 気づきのファシリテーション(2):協同ファシリテーターとしての成長を目指して
3．学会等名 日本協同教育学会（オンライン）
4．発表年 2021年

1．発表者名 岩田好司
2．発表標題 L'apprentissage cooperatif en faveur de l'education a la citoyennete mondiale et du vivre-ensemble.
3．学会等名 フランス語教育国際学会(モンゴル国立大学)（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 岩田好司
2．発表標題 気づきのファシリテーション:「教室内ランク」をめぐって
3．学会等名 日本協同教育学会（高知大学）
4．発表年 2019年

1．発表者名 岩田好司
2．発表標題 日本語教育と協同学習
3．学会等名 カイロ大学主催国際シンポジウム（カイロ大学）（国際学会）
4．発表年 2020年

1. 発表者名 岩田好司
2. 発表標題 「肯定的相互依存と個人の責任」：— ジョンソンらの研修プログラムに即したワークショップ + α
3. 学会等名 日本協同教育学会（梅花女子大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshinori Iwata
2. 発表標題 Developing Rank Awareness in the Classroom: A Workshop for Facilitators in Cooperative Education
3. 学会等名 国際協同教育学会（台北教育大学）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 イングリッド・ローズ、ケイ・ライアン(著) 岩田好司(翻訳)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 KDP https://www.amazon.co.jp/dp/B08GQBLP2X	5. 総ページ数 177
3. 書名 臨死への扉:新たな看取りのアプローチ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------